

開催趣意書

「京都きこえのフェスタ」は京都府難聴者協会、特定非営利活動法人京都市中途失聴・難聴者協会の主催、一般社団法人全日本難聴者・中途失聴者団体連合会（略称：全難聴・窓口補聴医療対策部）の共催により開催します。

この催しは、テーマを「聞こえの支援を考える、聞こえの未来を体験する」とし、主に近隣地域の一般市民、難聴者、医療関係者、教育関係者、補聴機器販売従事者を対象に広く聞こえの情報提供を目的に開催します。

2日間に渡ってそれぞれ補聴器、人工内耳のセクションを設け、機器展示、関連メーカーによる発表、シンポジウムを同時開催します。会期中のシンポジウムでは当事者、関係団体、関係者を中心に課題を提示し、その解決に向けて情報を共有・討論する場とします。

聞こえの問題、課題はその重要度に比して分かりにくいまま放置されてしまっている、と言っても過言ではありません。社会資源の整備、機器の供給の在り方の検討などは、早急に取り組む必要性があると感じています。

その大きな目的背景には「きこえの健康支援センター」設立構想の推進があります。今、難聴者の全国組織である全難聴では医療、リハビリ面での機能を持つ拠点作りをすすめよう、と取り組んでいます。難聴自覚者の人口増加に伴い、地域での医師による医療相談、専門職による検査、ひいては補聴器の装用調整と評価、人工内耳のマッピング等のリハビリ、心理ケアやカウンセリング等を含めた充実した対応が望まれています。

今の補聴器供給体制は万全ではなく、人工内耳をはじめ機器の機能調整については医療機関や専門職の柔軟な関わりが欠かせません。将来的に新しい分野として人工聴覚器や再生医療も現実のものとなるでしょう。しかしながら、同時に新たなリハビリ体制の必要性も想起され、これら機器やシステムの効果的な活用にはやはり新たな社会資源（センター）が必要であろうと推測されます。

日本は人類史上、かつてない超高齢化社会であり、今、そしてこれから聞こえの問題解決に取り組むのは先進国としての責務でもあります。

しかし、社会において聞こえの啓発はまだまだその機会が充実しているとはいえません。また、センター実現のための制度を確立していくにはその基盤づくりが欠かせません。そのためには、地道な作業ではありますが、聞こえ、難聴とは何か、その聞こえの多様性を説明すると同時に、開催地域の特色、課題も合わせて提案、共有することが参加者の大きな気づきになる、と考えました。

京都きこえのフェスタは、聞こえの啓発と同時に将来に向けての「きこえのターニングポイント」になることを期待しています。